

核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会

No.50
会報

富山市桜橋通り6-13
TEL 076-442-8000
世話人代表 金井英子

8/11 映画上映会と被爆者の講演のつどい

日本原水爆被害者団体協議会 事務局長 木戸季市さんを招いて



お話される木戸季市氏

8月11日、当会は「2019年映画上映会と被爆者の講演のつどい」を富山市・タワー111スカイホールで開催し、85人が参加しました。これには県被爆者協議会、被爆二世・三世の会、県保険医協会が後援しています。世話人 花崎広子氏司会を花崎広子世話人が務め、冒頭に金井英子世話人代表が主催者を代表して挨拶しました。



世話人 花崎広子氏

主催者挨拶：金井英子世話人代表



世話人代表
金井英子氏

この会は今年で結成30年、世話人代表は佐々學先生、片山喬先生と著名な方々のあとに私。私は肩書がありません。あるのは、暁第16710部隊に所属し、爆心地から2キロで被爆した父をもつ被爆二世という悲しいレッテルです。

2年前、県被爆者協議会が二世中心の活動に移行しました。私は、それを機に悲しみではなく平和のために心と体を使いなさいという使命を、天からいただいたと思っております。

この会の歴史を振り返ると、2005年から映画の上映と被爆者の体験を聞く会を続けてきましたが、被爆者の方が亡くなられたり、会話が不自由になられたり次第に難しくなってきました。それでも、今年も開催できたのは皆さんのお力添えの賜物と感謝しております。

平和式典で広島・長崎両市長が核兵器禁止条約の批准を政府に強く求めましたが、安倍首相は一言もふれませんでした。富山ではこの秋に県議会に働きかけることを県内の非核4団体で計画していますので、ぜひご賛同下さいませようお願いいたします。

また、忘れてならないのはフクシマです。放射線の影響はないと国は繰り返していますが、小児の甲状腺がん多発を多くの小児科医師が科学的に証明し、汚染地域での周産期死亡が増加していることが統計的に明らかになっています。二度と健康破壊、生活破壊、環境破壊を起こさないよう、すべての原発の再稼働に反対し速やかな廃炉を求めていきたいと思っております。

その後、映画『夕凧の街 桜の国』の上映と長崎で被爆した木戸季市氏の講演、県被爆者協議会会長の小島貴雄氏の挨拶がありました。

最後に小熊清史世話人副代表が閉会のあいさつを述べました。



世話人副代表
小熊清史氏

- 映画『夕凧の街 桜の国』あらすじと参加者の感想2
- 「私の被爆体験と核兵器のない世界を求めて」（木戸季市氏の講演要旨）3~6
- 『広島慰霊の旅』を終えて（県被爆者協議会の小島貴雄氏からの寄稿）7
- （案内）11/16「非核平和富山県宣言」20周年記念シンポジウム8

映画『夕凧の街 桜の国』

「夕凧の街」は昭和33年の広島が舞台で、被爆した皆実（麻生久美子）がその13年後に原爆症で亡くなる。「桜の国」は現代の東京。皆実の姪の七波（田中麗奈）が父の旭（堺正章）を追って広島へ行く、というつながりのある物語である。

【夕凧の街】

昭和33年、広島。被爆した平野皆実は母（藤村志保）と二人で暮らしながら建設会社で働いている。父と妹は原爆によってすでに他界。旭という弟は5歳のときに水戸に疎開し、そのまま伯母夫婦の養子になった。

会社には内越（吉沢悠）という青年がいて、皆実とお互い惹かれあっているが、皆実は自分が被爆者であるため、恋に積極的になれずにいた。新大橋のたもとで求愛されるが、同じ橋の下で無数の死体が浮かんでいた原爆投下直後の光景が蘇る。あの日、助けを求める負傷者を見捨て、死体を平気で跨いだり下駄を泥棒して歩いた自分が幸せになるわけにはいかないと自分を責める皆実に内越は言う。

「生きとってくれて、ありがとうな」

そんな皆実の体を放射能が蝕んでいく。夏休みに弟の旭が持ってきた土産ののし梅も、もう皆実の喉を通らない。皆実は父が買ってくれたかんざしを母に託し、この世を去る。

「なんで広島だったんだろう。なんで広島にピカが落ちたんだろう」



「落ちたんじゃない。落とされたのよ」
皆実のセリフがせつない。

【桜の国】

平成19年、東京。七波の父、旭は最近行動がおかしい。気になった七波は尾行してみることに。駅前で偶然会った幼馴染の東子（中越典子）とともに、父が乗り込んだ夜行バスで広島に向かうことになる。

今年には皆実の50回忌。父はかつて姉の皆実と交流があった人たちを訪ね歩いているのだった。

七波の父、旭は水戸の高校を卒業後広島の大学に進学し、そのときに知り合った被爆女性と結婚した。その母も40歳を前にして他界し、また祖母もすでに亡くなっていた。自分は被爆2世であることを実感する七波。そして東子は七波の弟、凧生との交際を被爆2世であることを理由に両親から反対されていたのだった。東京に戻り、七波は尾行していたことが父にばれていたと知る。



そんな七波に父は「おまえは皆実姉さんに少し似ている。だからおまえが幸せにならんな」とやさしく話しかけるのだった。

参加者された方々の感想から

- とても心に残るシーンが多かった。私たちはこのような出来事を念頭に、生きていくことの大切さを感じながら人生を送っていかねばならないと思った。すばらしい映画だと思つ。
- 一瞬で命を絶たれた人たちの悲惨さと同時に、被爆者の方々は今でも苦しみが続いていることを思い知らされた。核のない世界を、すべての人の幸せを願うばかりです。
- 映画では被爆者の複雑な心情が表現されており感動しました。講演では被爆の悲惨さを強く感じ、今後も伝えていってほしいと思います。
- 2世、3世のことは今まであまり考えたことがなかった。そんな原爆を作り続けている人間の浅はかさ、人類はどうなるのだろうか？ せめてこのような企画に参加し、子どもたちに教えねばならない。
- 時を超え、世代を超える原爆被害の非人間性の深刻さを改めて認識させられました。
- この映画は初めてです。心が痛みました。二度とこのような戦争を起こしてはいけません。若い世代にもっと本当の戦争の真実を伝える大切さを感じます。
- 映画よかったです。被爆者の思いがかなり抑えられた表現ですが心にしみました。もっと多くの人に見てもらいたいです。
- 私は現在70歳です。長崎市立山里中学校を卒業しました。被爆したわけではありませんが、あの頃被爆の話は周囲の方たちからよく聞かれました。今、この被爆ということを知っている人がとても少ないことに恐ろしさを感じています。

私の被爆体験と核兵器のない世界を求めて



日本原水爆被害者団体協議会
事務局長
木戸季市氏
すえいち

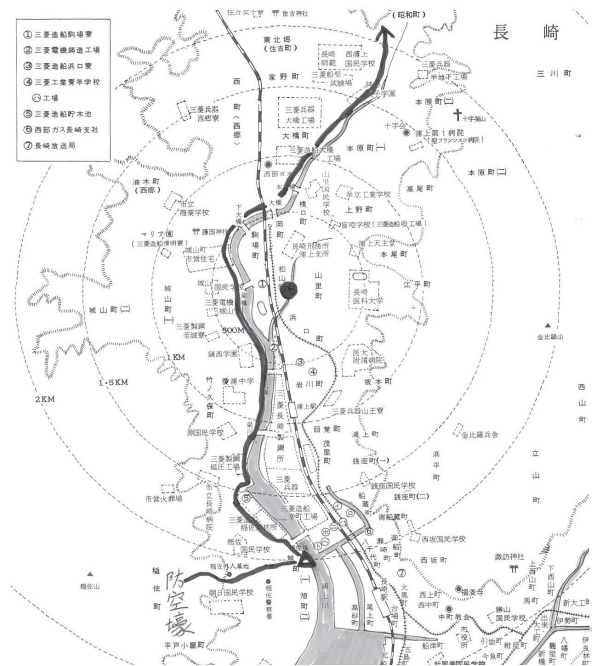
こんにちは。私は『夕凧の街 桜の国』を観るのは2回目です。正直心が揺れていてきちんとお話できるかどうか…。映画の中でお母さんが旭さんの結婚に反対していました。その理由は、被爆者と一緒にさせたくないというわけではありません。原爆で死んだ人をたくさん見てきた、もうこれ以上被爆者が死ぬのを見るのは嫌だという思いを感じて、私は心が震えたことを思い出しました。

私の被爆体験

私の被爆は、1945年8月9日と10日です。場所は被爆地図を見ましょう。円の中心●印が爆心地で、同心円の2キロの▲印が私の被爆したところです。長崎市旭町1丁目の自宅前の路上でした。母と一緒に近所のお母さんたちと配給のそうめんを取りに行こうと集まった時、飛行機の音が聞こえました。「おかしかね。アメリカの飛行機のごたる(「ようだ」の意)」と、あるお母さんの言葉が今も耳に残っています。

音が去った瞬間、ピカーッ。2キロではまさにピカドン、4～5キロならピカードーン、500mなら一瞬で何が何だかわからない(聞いた人はほとんど生きていない)。その時私は爆風で20mほど飛ばされ、気を失い、顔半分を火傷しました。横たわっている私たちを見つけた父は「みんな無事でよかった」と。その日は▲から西の防空壕に逃げました。

翌日、母は戸板に私は籠に乗せられ、地図の浦上川に沿って避難しました。私は5歳でしたので被爆の記憶は確かなのですが視線が低く、周囲の様子は鮮明ではありません。しかし我が家から中心部にかけては建物はなく、爆心地に近づくにつれて水を求める人や死体がゴロゴロとありました。



その様子は私の姉が長姉に宛てた手紙にこうあります。「長崎病院から先は一軒の家もなかとさ。護国神社の下まで壊れた家も見当たらんとさ。道には死体がゴロゴロ。見るまいとしても、あまりに多いがために。大橋の下までゴロゴロ。その時のままでさね。道の尾につくまで、死人がゴロゴロ…」

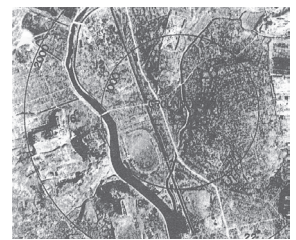


写真1：原爆投下2日前 写真2：原爆投下3日後

写真1は被爆の2日前のものでびっしり家が密集しています。2は、3日後の同じ場所ですが、まったく何もありません。図1のように母は戸板に乗せられ、図2のように大橋では水を求めて折り重なった死体があふれていたのです。



図1：竹の久保町で

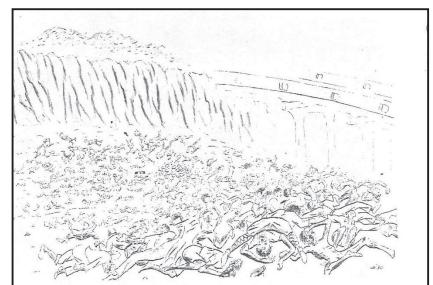


図2：大橋で

私は三度被爆者になった

今年で被爆74年、私は三度被爆者になったと言ようになります。一度目は1945年8月9日の長崎での物理的な被爆です。米軍は原爆被害の報道を禁止し、国民には正確な知識が与えられませんでした。また日本政府は同年10月に戦時災害保護法を打ち切るなど、援助の手を差しのべず、その中で被爆者は必死で生きてきたのです。もちろん私自身は当時何が起きているのかわかりませんでした。



1952年に米軍占領が終わって原爆報道が解禁になり、『アサヒグラフ』の悲惨な写真を見て自分は被爆者なんだと自覚しました。それが二度目です。

当時、被爆者は白血病でいずれ死ぬとか奇形児が生まれるとか言われ、一見健康そうな人でも不安や苦悩が始まった時代でした。以後私は普通の少年・青年として育ちました。しかし映画の中にもありましたが、被爆者ということを隠す意識はなかったのですが話すこともできませんでした。大学3年で初めて友人に話した時、非常にエネルギーが要ったことを覚えています。

三度目は1991年、被爆者運動に参加した時です。岐阜県原爆被害者の会再建のため事務局長を引

き受けました。こちらの反核医師の会の結成から2年後のことですから、その意味では私はわずか28年のまだまだ若い被爆者ということになります。あの日確かに被爆したけれども、それだけで被爆者と言えるのかという思いがずっとありました。被爆者運動に参加する中で、あなたの人生で大切な思い出は何か、と問われて答えた被団協代表委員の故谷口さんの「原爆に抗って生きてきたことそのものです」という言葉に教えられました。

日本被団協が明らかにしたこと

日本原水爆被害者団体協議会（被団協）結成総会の宣言文に、「かくて私たちは自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おうという決意を誓い合ったのであります」とあります。この誓いを貫き、被爆の実相を伝え、徹底した調査研究を行いながら「核兵器をなくせ」「原爆被害の国家補償を」という要求を作り出しました。

今日までの被団協運動が明らかにしたことは、①原爆は大量の命を無差別に奪い、②今日まで身体、暮らし、心に傷を負わせ続ける、③原爆は破壊と殺戮だけをもたらす悪魔の兵器、④人類と共存できない反人間的兵器、だということです。

ところで「ヒバクシャ」というと使われ方には大きく二つあります。ひとつは原爆被害者にとどまらず、ウラン精製や核兵器の開発で被ばくした人々、さらには原発事故の影響を受けた人々まで世界的規模に広がる使い方です。もう一つは、被爆者健康手帳を持っている人のみを指す場合です。そこで原爆

原爆がもたらしたもの

原爆は、広島と長崎を一瞬にして死の街に変えました。赤く焼けただれてふくれあがった屍の山。眼球や内臓のどび出した死体。黒焦げの満員電車。倒れた家の下敷きになり、生きながら焼かれた人々。髪を逆立て、ずるむけの皮膚をぶら下げた幽霊のような行列。人の世の出来事とは到底いえない無残な光景でした。

わが子や親を助けることも、生死をさまよう人に水をやることもできませんでした。人間らしいことをしてやれなかったその口惜しさ、つらさは、生涯忘れられることができません。

いったんは死の淵から逃れた人も、また、家族さがしや救援にかけつけた人たちも、放射能に侵され、次々に髪が脱げ、血をはいて、たおれていきました。

生き残った人たちも「原爆」を背負いつづけています。

「家もなく無一物になり、何一つ楽しいことはなく、生けるしかばねです」「一生病臥の毎日です」「働こうにも人並みに働けない。人からはなまけ者と言われるが、こんな体にしたのは誰なのか。結婚・就職などの差別をおそれ、被爆者であることを隠し続けている人たちも少なくありません。

ちょっとした体の不調でも、原爆のせいではないかと思わずらい、あるいはまた、いつ、原爆症が出るか、子や孫への影響は……と、胸に爆弾を抱いたような毎日なのです。

原爆で肉親を奪われた遺族も、悲しみと恨みの40年を生き延びました。

「身寄りが一人もいなくなり、故郷もなくなりました」「子供を助けられなかった親の悲しみは、死ぬまで続きます」「原爆の落ちた日から影も形もなくなった主人のことを忘れよというのは酷です。今でもきのうのこのように思い出します」「姉は、死ぬまで毎日が病気との闘いでした」

原爆は、閃光とともに2つの街を壊滅させ、無差別に大量殺傷しました。人類が初めて体験した核戦争の「地獄」でした。

原爆は、今にいたるまで、被爆者のからだ、くらし、こころにわたる被害を及ぼし続けています。

原爆は、人間として死ぬことも、人間らしく生きることも許しません。核兵器はもともと、「絶滅」だけを目的とした狂気の兵器です。人間として認めることのできない絶対悪の兵器なのです。

日本被団協の原爆被害者の基本要請（昭和59年11月18日）より抜粋

で亡くなった被爆者の死というのはどういう死だったのか考えてみましょう。

原爆死とは？

原爆死とは、1) 大量死であり、2) 無差別であり、3) 突然死です。あの日、飛行機の音を聞いて、その瞬間自分に何が起こったのか何もわからず死んでいった。そういう状態ですから、4) 未確認死です。家族にとってどこで死んだのかもわからない。一人の人間として弔うことができない、人間としての尊厳を奪われた死なのです。

そして、5) なお今日まで続いてくる死です。原爆で生きる糧を失い、放射能の後遺症で苦しみ、人間らしい生活ができなくなりました。生き残った人たちも「助けて」と足元を握られた手を振り切った自分の非人間性を、今日までずっと心の傷として引きづっているのです。何年か前に東京で、年老いた被爆者がハイヒールの若い女性と接触して二人とも転びました。被団協の事務所に来て足首をさすりながら言うのです。「あの若い子大丈夫だったろうか。私にバチがあたったの。あの時、若いお嬢さんが私の足を握ったのを振り離して逃げたから」。このように被爆者は心の傷とともに生きてきました。

私はこの頃、被爆者の後遺症は放射線の影響もありますが、それだけでなく、大きな心の傷が病気を引き起こさないはずがないと思うようになりました。

国はなぜ被爆者の願いを聞き入れないのか

国はなぜ被爆者の願いを聞き入れないのでしょうか。核兵器禁止条約の署名・調印をしない。核抑止論に拘泥し核の傘を離脱しようとししない。原爆被害者の国家補償もしない。

ここにその根拠らしき文章があります。

「およそ戦争という国の存亡をかけての非常事態のもとにおいては、国民がその生命・身体・財産について、その戦争によって何らかの犠牲を余議なくされたとしても、それは、国をあげての戦争による一般の犠牲として、すべての国民がひとしく受忍しなければならない」。これは1980年の厚生大臣の私的諮問機関「原爆被爆者対策基本問題懇談会」の答申書の内容です。

簡単に言えば、殺されても、ケガをしても、家を失っても、戦争なんだから我慢しなさい、と言っています。注意すべきは過去形ではなく、現在進行形で書かれているので、これからの戦争でどんなに悲惨なめにあっても国は補償しませんよ、と宣言しているに等しい。これを根拠に政府は被爆者や戦争被災者など国民の要求を拒絶してきたのです。

戦後教育の自由な雰囲気 で育った

79年の生涯を振り返って私の原点は、両親から命をもらったことと、やはり被爆したことだと思います。8人兄弟の末っ子で、上が姉たち下が兄たちでした。これが逆だったら兄たちはみな戦死していただろうと思います。そういう世代でした。学校教育は戦後の自由な雰囲気の中で育ちました。いま保守の人たちは戦後教育のせいで権利ばかり主張すると言われますが、あれは実感として間違いです。戦後教育は一人ひとり人間を大切にすることでした。それを戦前の教育に変えようとしてきたのが歴代の政府で、現在、本当に戦前に変わりつつあるという印象を強く感じます。

押し付け憲法論の矛盾

自衛隊を憲法に明記せよと言われますが、警察予備隊として創ったのはマッカーサーです。帝国憲法改正の直前、新憲法の9条は本当にこれでいいのかとアメリカ側から問われたとき、戦後復興のため



には吉田茂首相はこれでいいと言いました。1953年の池田・ロバートソン会談で、名称変更された保安隊を増強し、再軍備のために9条を変えたらどうかとアメリカ側から言われました。その時池田勇人首相は、「無理だ、9条はもはや国民に定着している。国民の意識を変えるためにはまず教育を変える必要がある。それまで待ってくれ」と答えたそうです。以後、民主的な戦後教育が後戻りしていくのですが、自衛隊を作り、大きくし、戦争ができるよう9条を変えろというのはアメリカから言い出されたことなのです。保守派の人たちは新憲法は押しつけられた憲法だから9条を改正するんだと言いますが、自衛隊も9条改正もはじめはアメリカから押し付けられたもの。この矛盾について安倍首相が何も触れないのはおかしいです。

被爆者の要求は 戦争をしない国のしくみ

戦後の歴史の中で今がもっとも戦前に近づいているという危機感を持っています。そういう中で被爆者運動は「核兵器をなくすこと」と「原爆被害への国家補償」を求めています。原爆被害とは戦争被害です。戦争をやっていたから原爆が投下された。だから被爆者を作らないためには戦争を起こさせないことです。別の言い方をすれば戦争をしない仕組みを作ることが大切です。幸い私たち日本は戦争をしない仕組みの基本を持っています。憲法9条ですね。しかしそれだけでは弱い、具体的な法律は何もないのですから。たとえば原爆の被害にあったらこういう補償をします、空襲にあったらこう補償します、という法律や仕組みを作れば、本当に戦争をしない国になるでしょう。原爆被害への国家補償を求めるといことは、戦争をしない仕組みを作りなさいという要求なんですね。

日本は無条件降伏したのか？

余談になりますが、私は本当に日本は無条件降伏をしたのか、という疑問を持っています。ポツダム宣言をよく読むと、5項に「吾等ノ条件ハ左ノ如シ」とあり、6項以降にその条件が書かれています。特に10項の「日本国政府ハ日本国国民ノ間ニ於ケル民主主義的傾向ノ復活強化ニ対スル一切ノ障礙ヲ除去スベシ言論、宗教及思想ノ自由並ニ基本的人権ノ尊重ハ確立セラルベシ」というのが戦後日本の基本となります。これらの条件によってこういう日本を作ると連合国側と約束して調印しました。ですから無条件降伏させられたのは軍隊だけで、日本は民主的で基本的人権が尊重される国になるという条件を守ることを約束したのだ、と考えています。

最後に長崎平和宣言にある詩を朗読して私の話を終わります。

幾千の人の手足がふきとび
腸わたが流れ出て人の体にうじ虫がわいた
息ある者は肉親をさがしもとめて
死がいを見つけ そして焼いた
人間を焼く煙が立ちのぼり
罪なき人の血が流れて浦上川を赤くそめた
ケロイドだけを残してやっと戦争が終わった
だけど……
父も母も もういない
兄も妹ももどってはこない
人は忘れやすく弱いものだから
あやまちをくり返す
だけど……
このことだけは忘れてはならない
このことだけはくり返してはならない
どんなことがあっても……

安倍首相が「しまむら」に読むところ

ポツダム宣言（抜粋）

（日本国ノ降伏条件ヲ定メタル宣言）
1945（昭和20）年7月26日発表

- 10 我々は日本人を民族として奴隷化しようとしたり、または、国民として滅亡させようとする意図を有するわけではないが、我らの捕虜を虐待した者を含む一切の戦争犯罪人に対しては厳重な処罰を加える。日本国政府は日本国国民の間における民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障害を除去すべきだ。言論、宗教、思想の自由、ならびに基本的人権の尊重は確立されなければならない。
- 11 日本国はその経済を維持し、かつ公正な損害賠償の取り立てを可能にするように産業を維持することを許される。ただし、日本国に戦争のための再軍備をさせるような産業はこの限りではない。右の目的のための原料の入手、（原料の支配は含まない）を許可される。日本国は将来世界の貿易関係への参加を許される。
- 12 前記の諸目的が達成され、かつ、日本国国民の自由に表示された意思に従って平和的な傾向を有し、かつ、責任ある政府が樹立された場合には、連合国の占領軍はただちに日本国より撤収する。
- 13 我々は日本国政府がただちに日本国軍隊の無条件降伏を宣言し、かつ、右行動における同政府の誠意によって適正かつ十分な保障を提供することを同国政府に対し要求する。右以外の日本国の選択は、迅速かつ完全なる壊滅があるだけだ。

* 日本政府はこれを黙殺したため、予告通り連合軍は甚大な攻撃を行い、8月6日に広島、9日に長崎に原爆が投下された。

『広島慰霊の旅』を終えて

富山県被爆者協議会 会長

小島 貴雄

被爆二世として原点を見つめなおす

私たち富山県被爆者協議会（以後、当会）は、「原爆被爆者および、その子、孫の健康の維持増進と福祉の向上を図ること」を目的に、1960年5月に結成され、今年で60年目を迎えました。その間、諸先輩方の努力により一時は会員数は百数十名を数え、富山県見舞金条例の制定、相談員制度発足、被爆者絵画展、そして被爆体験記録集の発刊等、数々の事業に取り組んでまいりました。しかしながら戦後74年を迎えた今年、県内被爆者は48名に減少し、更には平均年齢が85歳を超える状況になり、当会の運営は二世に委ねられました。

被爆者二世として、被爆者自身とは別の視点・立場から当会の原点を見つめるに際し、被爆体験記録集の再編集と、被爆の実相の再認識を喫緊の課題ととらえ、今年度は再整備された広島原爆資料館見学を企画しました。

今回の慰霊の旅での目的は、三つです。一つ目は、救援援護のための入市被爆者の足跡をたどること。二つ目は、広島在住の二世との懇談を通して先進的な運動の一端を学ぶこと。三つ目が、今春リニューアルされた資料館見学を通して原爆の実相を学ぶことです。

宇品から江田島へ

7月27日・28日の1泊2日の旅でしたが、初日の昼過ぎに広島に到着した私たち5人の会員は、宇品にある陸軍船舶司令部の跡地を訪ねました。当日は宇品での花火大会の日であり観覧の人出が多く、花火による慰霊の感すら感じられましたが、戦後長い歳月を経た今日においては、その様な感傷に浸っているのは私たちだけであったと思います。

宇品の港から約20分の船旅で向かった先が江田島の切串の港でした。港から車で5分余りの幸ノ浦は、陸軍船舶練習部隊の秘密訓練基地が置かれた地であり、今は千数百名を慰霊するための碑が、ひっそりと瀬戸内の海を眺めながら佇むばかりでした。慰霊碑を管理されていた橋本静之氏と、現在管理を引き継いでおられる岡野数正氏等から秘められた歴史の一端を聴かせていただくと共に、退避壕跡を案内していただきました。若かりし頃の当会前会長の田島正雄さんや私の父が訓練していた姿を想像し



幸ノ浦の慰霊碑前で岡野さん（左端）から水上特攻部隊の歴史などを聞く小島会長（右から2人目）たち協議会のメンバー

ながら、広島上空に立ち上る「きのこ雲」を想定しました。未知なる物との遭遇による驚愕は如何ばかりであったか想像することすらできませんでした。

熱心な広島二世部会の運動

市内に戻り、夜には広島県原爆被害者団体協議会の二世部会のメンバーとの交流を行いました。先進的で活発な運動に敬意を表するばかりでした。その話の中で、原爆症が遠因と思われるような症状が、三世・四世に現れている可能性があり、国及び県に対して至急の調査依頼を求めているという話が印象的でした。富山県においても、調査して確認することが喫緊の課題であると認識しました。

爆心地、ドーム、元安川を歩く

2日目の28日は、平和記念公園周辺を二十数年ぶりに訪ねました。先ずは爆心地である島外科内科病院前にある碑を觀ました。外国人観光客も多く見学に訪れておられました。晴れ渡る上空にエノラ・ゲイの姿が74年前に立ちはだかっていたことを思うと、胸の苦しみを感しました。続いて原爆ドーム。核兵器廃絶と恒久平和を求める誓いのシンボルとしての威容を感じました。続いて元安川河川敷。そこは正に多くの被爆者が水を求めて飛び込んだ場所であり、救援援護に赴いた兵士たちが死傷者を掬い上げた場所です。穏やかな川の流れに、時の流れを重ねてみました。原爆の子の像では鐘を鳴らして、亡くなった子供たちの霊を弔い、平和の灯では全世界からの核兵器の廃絶を誓い、原爆死没者慰霊碑では「安らかにお眠りください 過ちは繰り返させぬから」と祈りを捧げ、誓いを新たにしました。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、厳かな

(次ページに続く)

「非核平和富山県宣言」20周年記念シンポジウム

核兵器のない世界へ

2019年

日時 **11月16日(土)**

開場 13:00/ 開会 13:30 ~ 閉会 16:00

会場 **パレブラン高志会館**
2Fカルチャーホール

富山県議会が「非核平和県宣言」を決議してから20年。世界では核兵器廃絶の動きが進み、一昨年には核兵器禁止条約が採択されました。ところが核保有国や日本は条約に反対の立場を取っています。

このシンポジウムを通じ、富山県議会などに対し、政府に条約批准を求めるよう働きかけていきたいと思います。

<基調講演>

被爆者はなぜ核兵器廃絶を 求めるのか

日本原水爆被害者団体協議会

事務局次長 **藤森 俊希** さん



(ふじもりとしき)

1944年、広島市生まれ。1歳で被爆、姉2人と甥を失う。2012年から被団協事務局次長。2017年、ICANのノーベル平和賞授賞式に出席。国連演説で自身の体験を語り、核廃絶を訴える。長野県茅野市在住。

主催

非核の政府を求める富山の会、原水爆禁止富山県協議会
富山県被爆者協議会、核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

(前ページからの続き)

雰囲気の中で、県内原爆死没者の遺影と映像画面を通しての対面。自由に閲覧できるシステムに感動しました。前日に広島の方からの推奨を受けていただけに、期待していた以上の感銘を受けました。

死傷者を救い上げた棒の現物に涙する

最後に訪れたのが広島平和記念資料館でした。夏休み期間中ということもあり、多くの観覧者の中、新潟出身のガイド(渡辺さん)の案内のもとに、館内を巡りました。地下からの観覧が、全容把握には効果的であったと思います。元安橋の高熱で湾曲した橋脚は、象徴的でした。川から死傷者を掬い上げる引っ掻き棒は、現物として展示されています。事前に聞き及んでいた話を彷彿させるものであり、心ならずも涙腺を潤しました。多くの被爆者の手による絵画は、苦悩の中で描き切れなかったであろう情景を連想させ、より一層の惨状を訴えかけて来ました。

今回の現地を見聞して得た新鮮な感動を、今後の富山県内での各種の活動の場で反核平和運動のために活かしたいと思いました。

今年の映画と講演のつどいの開催にあたり、20人の会員の皆さまから多額のご寄付をいただきました。

世話人会一同として、この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

編集後記

●「戦争によって何らかの犠牲を余儀なくされたとしても、すべての国民がひとしく受忍しなければならない」。いわゆる戦争被害受忍論である。

●1968年の在外財産損失訴訟の最高裁判決がリーディングケースとなり、80年代以降、空襲や原爆など戦争被害に対する補償請求訴訟で、原告の訴えを退ける根拠として幾度となく引用されてきた。(直野章子『戦争被害受忍論』より)

●それは国家負担の際限のない広がりを防ぐとともに、「一億総懺悔」など戦争責任をあいまいにした戦後処理システムを支える役割を果たしてきた。

●「原爆被害者の国家補償」を求める活動は、戦争被害の受忍を当然視せず、国の責任を明確にすることで戦争を起こさせないようにするものだ。(S・M)